

『文語の苑第九回シンポジウム』概要

第九回文語の苑シンポジウムは、「文語紀行文の書き方、奥の細道と方丈記―文語紀行文五十撰の刊行によせて」をテーマとして令和元年十一月十日（日）午後一時半より四時まで恆例により東洋大学白山キャンパス一二五記念ホールにて開催せられたる處、約七十名の参加者を得て成功裡に之を了せり。その概要下記の通り。

文語の苑理事長土屋博の開會挨拶あり、令和の時代となり萬葉集など傳統を尊重する雰圍氣の生れたるは文語普及にとりて追ひ風かも知れずとの期待を述べ。

次に熊澤南水氏（朗讀家、文語の苑社友）による「奥の細道」及び「方丈記」の朗讀あり、一氣に會場は日本語の美しき響きに満たさることとなる。次いで愛甲次郎氏（文語の苑名譽會長）の「文語紀

行文の書き方」と題する講演あり。現代人にとりて日記・書簡と並び文語を書く機會として重要な紀行文を取り上げ、パワーポイントを駆使しての分かり易き内容となれり。

次いで市川浩氏（文語の苑副會長）の「方丈記臆解―悟りへの道」と題する講演あり。市川氏の嚴密なる文法的考察は通説に一石を投ずるものとなるべし。次いで高柳祐子氏（東洋大学准教授）の「中世連教師の紀行文―宗長日記を読む」と題する講演あり。日頃馴染み薄き連教師の世界を活寫するものとなれり。

最後に竹村牧男氏（東洋大学學長）の開會挨拶も兼ねたる「空海の長安往還の一端について」と題する講演あり。千年以上昔の不世出の偉人による文語は極めて格調高く、聴衆を魅了せり。

これまで九年連続して開催にご協力を頂きたる東洋大学にはこの場を借りて感謝を申し上げます。

（土屋博記）

（令和元年十一月二十七日受附）

文語による紀行文

愛甲次郎

東洋大學シンポジウムに於ける講演要旨

(令和元年十一月十日)

1. 現代生活における文語の使用分野は、日記、書簡、紀行文の三なり。
2. 本稿は第三の紀行文に係るものなり。
3. 旅行の如き特別の體驗に關しては古來人は和歌或は俳句を残し追憶のよすがとせり。
4. 追憶のよすがとしては詩的作品のみならず散文も逸すべからず。之紀行文なり。
5. 余の人に勸むるは先人に倣ひ旅行にあたって文語による紀行文を物することなり。
6. 何故文語なりや。
7. 我が民族の言葉を磨く努力は文語に凝集結果し、文語はラテン語等に並び世界五大文章語の

一となれり。

6. 明治以降の近代化と今次の敗戦の影響を受け、この一大文化遺産は今や存亡の危機に瀕す。
 7. 文語を装ひて文を綴らば、千年の伝統を負ふ優美、格調、律動感は自づと備はる。
 8. 文語にて紀行文を綴る手引き
- (1) 手始めは簡単に
 - (2) ガイドブックの利用
 - (3) 案内板等の利用
 - (4) バスガイドの説明
 - (5) 空港などの描寫
 - (6) メモの書き溜め
 - (7) 古人の引用
- 先人の模倣に徹すべし。

(令和二年一月八日受付)

中世連歌師の紀行文 『宗長日記』を讀む

高柳祐子

宗長儀、戰國屈指の連歌師なり。而してまた、其の紀行文にも秀逸なるもの尠なからず。連歌は即ち、短歌の上句と下句の詠み人相異なる歌にして、平安貴族の言語遊戯にその端を發す。宗長世にありし砌には、上句、下句を交互に百句並ぶる長連歌なるもの、既に相當なる文學的發達を遂ぐるありき。

いづれの地にも赴くを躊躇はざれば、往々漂泊の旅路を辿る折もありけり。宗長またかくのごとし。

宗長、文安五年(一四四八)駿河國に出生、天文元年(一五一二)八十五歳にて逝世す。駿河の守護今川氏に仕へ、十八歳にて落飾したりといへども、終生忠節を枉ぐるなし。主家の爲に折衝の責に任じ、連歌の才を以て他家の信を得て、今川家の發展に貢獻する所あり。すなはち、連歌とは、趣味風流の域に留まるには非ざりき。

連歌の作法に式目と稱ふる規範あり。凡そ連歌師たる者、これを悉く自家藥籠中に收めてこそ、連歌師たるの名を得たれ。而して、さなるにとどまらず、「伊勢物語」「源氏物語」杯古典文學の造詣深く、之に加へて作歌の才尋常ならざるの譽あるが常なり。かかる名高き連歌師連は、權柄保つ貴顯の庇護を受け、あるいは都より下りて大名豪商の招きに與り、

こたび御紹介仕る『宗長日記』は、宗長最後の紀行文にして、末期の近きを悟するの齡になりて記したるなり。宗長、老いてより後は、九州・東國等へ遠行することなく、都と駿河の往還を專にす。この日

記にても、衰へたる瘦軀に鞭打つて歩を進むる苦衷を裏まず描き出してあり。

この峠は、昔より馬輿とをらぬ子細ありと聞けども、老いの足ひと足も進まず。人に負はるれば胸痛み息も絶え、谷にも落入りぬべくおぼえ侍れば、老いのこしかき二・三十人梅戸よりやとひよびて、左右の大石を踏まへ、おち境つ破をまたげ、たびたび心をまどひし。

此が一文は、八風峠を越えたりし折の記載なり。八風峠は名高き難所、これを避けて、鈴鹿峠に回らんと欲せしが、道中合戦の出来したりければ、八風峠を経るの外はなかりき。しみじみと讀むに付けても、偉大なる連歌師、戦國のまっただ中に生を享けたりと感新たなるものあり。

宗長自ら述ぶるに、落馬致してより此の方、馬を恐れて已まず、と。木幡の里は馬の古歌を以て知らるれど、ここを過ぎたる砌には、「昔われ落ちて杖つく老いのなれば馬のあるさとの名さへ恐ろし」との戯れ歌を記したり。響に落馬したりし折には、「いかにせんものかきささむ手はおきてはしとる事と尻ぬぐふ事」とも詠みたり。蓋し、愉快なる人なりしに相違なし。『宗長日記』を閲するに、作者のユーモア精神の遺憾なく發揮せられたる記事ぞ散見せらるる。

宗長天性のユーモア、如何ぞ感嘆せられであるべけん。而して、戦國の世にしあれば、一方ならぬ緊張感あり。是すなはち『宗長日記』をして如今に到るまで、數多好事家の心を捉へて離さざるの所以ならん。かつまた、旅の描寫の克明なる、紀行文の華とも評すべき名文、然而、聊かも難解ならざるは吃驚に値す。東海道を往還すること頻りにして、熱

田神宮を始め、名所舊跡の記事尠ならず。歴史を偲ばんがための地誌たる用途もあり。己にして、岩波文庫にも収録せらるれば、原典に觸れんが爲に勞するの要なし。研究家を除きたる外は、未だ人口に膾炙してありとは言ひ得ぬ憾みあれど、これを機に、摩訶不思議なる宗長の世界を訪れんと思ひ立たれん各位の多からんことを。

(令和元年十二月二日受附)

閉會のあいさつ・空海の長安往還の一端について

竹村牧男

本日、御多用に渡らせたまふ皆々様、文語の苑シンボジウムに出席せられむが爲に本學まで御來駕賜はり、仕合せの存念此上なし。加之、今年もまた開催の場に本學を御指名戴くの榮に浴したる、えやは感涙に堪ふべき。土屋理事長並びに關係各位の御高配、深く謝し奉る。

今般、文語の苑には、『文語紀行文五十撰』を完成・刊行したまひたるの條、心底祝至極に存ずる許りなり。寔に日本民族精神史の凝縮せられたる力作と感嘆するの外なく、本日シンボジウムまた、これが出版を記念せむが爲の充實せる盛會となりて、慶賀の段筆舌に盡すべからず。御參會の貴顯にも必定感銘新たに思召されたるに相違なし。

扱、閉會に際して、本日のテーマ「紀行文」に因み、「空海の長安往還の一端について」、些少なれど御紹介致したく、御耳を汚し奉るの條、宥恕あらせたまへ。所謂紀行文とは聊か趣を異にするらめど、空海自ら求法の旅の顛末を報ずる所なり。

周知の如く、空海儀、延暦二十三年（八〇四年）、遣唐使とともに入唐せらる。坐乗せる遣唐船は、暴風に遭遇して數十日間流浪したるの末、漸くにして南の方福州（福建省）の港に漂着するを得たり。當局、一行の國書を帯びざるを怪しみて、容易に上陸するを許さず。徒に時を費やすを愁へたる空海、自ら筆を取りて上申書を認む。波濤萬里を越え來りし難儀を縷々と述ぶるの段、左の如し。

……既に本儀を辭して中途に及ぶ比、暴雨、帆を穿ち、戕風、柁を折る。高波、僕に沃いで、短舟、齧齧たり。戕風、朝に扇げば、肝を耽羅の狼心に摧き、北氣、夕に發すれば、膽を留求の虎性に失ふ。猛風に瞎覺して葦を驚口に待ち、鷺沐に攢眉して宅を鯨腹に占む。浪に随つて昇沈し、風に任せて南北す。但だ天水の碧色をのみ見る。豈に山谷の白霧を視むや。彼上に掣掣たること二月有餘、水盡き人疲れて溼永く陸遠し。虚を飛ぶに翼脱け、水を泳ぐに鱗殺たらむ。何ぞ噓と爲るに足らむや。僅かに八月初日、乍ちに雲峰を見て欣悅極りなし。赤子の母を得たるに過ぎ、早苗の霖に遇へるに越えたり。……

〔大使、福州の觀察使に與ふるが爲の書〕、『性靈集』卷第五、定本第八卷、七八〜七九頁〕

また、左の如くに言へるもあり。

「是の故に、我が國、浮樸よりこのかた、常に好隣を事とす。獻ずる所の信物、印書を用ゐず、遣する所の使人、好偽も有ること甚し」（同前）

此の如く言へる、洵に格調高き感銘措く能はざる名文、書も名筆なりしと察せらる。吏僚之に吃驚し、直ちに入境を許す。

さらに旅程を伸ばし、長安に達す。西明寺を以て宿舎と爲し、般若三藏の下にて梵字等を學びて準備を重ね、そののち、つひに青龍寺を訪ねて惠果阿闍梨に師事するに至る。その喜悅は『御請來目錄』の具に語る所なり。曰く、

空海、西明寺の志明・談勝法師等五六人と、同じく往いて和尚に見ゆ。和尚、乍らに見て笑を合み、

喜歡して喜けて日く、我れ先に汝が來たらむことを知りて、相ひ待つこと久しかりつ。今日相ひ見る、大はな大好し、大はな大好し。報命、錫きなむと欲す、付法に人なし。必ず須らく速かに香花を辨じて灌頂壇に入るべし、と。

即ち本院に歸り、供具ぐぐを營辦えいべんして、六月の上旬、學法灌頂壇に入る。是の日、大悲胎藏大曼陀羅に臨み、花を抛るに偶然として中台の豐びるしや見な盧ら遮じや那な如ら來らの身上に着く。阿闍梨、讚じて日く、不可思議、不可思議と。再三讚嘆す。……

(『御請來目錄』。定本第一卷、三五—三六頁)

すなはち時を措おかざして入門し、僅々二月にして、密教の奥義を悉く相承す。惠果の俗弟子吳ご懸けんは、

『惠果阿闍梨行狀』(『廣付法傳』所收)に記すこと左の如し。

「今、日本の沙門空海有つて、來りて聖教を求め、兩部の秘奧、壇儀、印契を以てす。僕梵差なく、悉ことごとく心に愛くること、猶しやべいし瀉瓶しやべいの如し」(『惠果阿闍梨行狀』(『廣付法傳』所收、定本第一卷、一一二頁)と。

惠果、此を喜び、空海に授與せしむるに、密教の經典曼荼羅、また法具を以てす。斯は空海の爲に馳走を盡したる後、病の床に臥し、已やんぬ哉な、十二月十五日を一期として入滅す。惠果の傳法を與へたる弟子に義明なる者あれど、此を措おぎて、惠果の碑文を撰したるは空海なりき。なほ、此が碑文には、惠果示寂の夜の夢に顯現して、斯かは語りしとぞ記されたる。

弟子空海、桑梓を顧れば、則ち東海の東、行李を想へば、則ち難が中の難なり。波濤萬萬として、雲山、幾千ぞ。來たること我が力に非ず。歸らむこと

たる所を引用す。左の如し。

我が志に非ず。我を招くに鈎かぎを以てし、我を引くに索を以てす。船を泛べし朝には、數、異相を示し、帆を歸す夕べには、縷くはししく宿縁を説く。和尚、掩えむ色しよくの夜、境界の中に於いて弟子に告げて日く、汝、未だ知らずや、吾れと汝と宿契の深きことを。多生の中に相ひ共に誓願して密藏を弘演す。彼此に代る師資と爲ること、只だ一兩度のみにあらず。是の故に汝が遠涉を勤めて、我が深法を授く。受法、云ことに畢をばんぬ。吾が願も足んぬ。汝は西土にしてわが足を接す。吾れは東土して、汝が室に入らむ。久しく逗留すること莫れ。吾れ前に在つて去らん。竊に此の言を顧みるに、進退、我が能るに非ず、去留、我が師に隨ふ。……

(空海撰「大唐神都青龍寺故三朝國師灌頂阿闍梨惠果和尚碑」、『性靈集』卷第二、定本第八卷、三六頁)

而して、『御請來目錄』は、惠果の空海に遺誠し

竊かに喜けて日く、汝、密教の器、努力よ、努力よ。兩部の大法、秘密の印契、是に因つて學び得つ。自餘の弟子、若しは道、若しは俗、或は一部の大法を學し、或は一尊一契を得とも、兼貫することを得ず。岳流を報ぜむと欲するに、昊天、極りなし。如今、此の土に縁盡きて久しく住まること能はじ。宜しく此の兩部の大曼荼羅、一百餘部の金剛乘の法、及び三藏轉付の物、並びに供養の具等、請ふ、本郷に歸つて海内に流傳すべし。纒かに汝が來れるを見て、命の足らざらむことを恐る。今、則ち、法の在りとし有るを授く。經像、功畢んぬ。早く郷國に歸り、以て國家に奉じ、天下に流布して、蒼生の福を増せ。然らば則ち四海泰く、萬人樂しまむ。

(『御請來目錄』、定本第一卷、三七頁)

空海、此の如く師の眞摯なる願ひを受け、經典のみならず曼荼羅、祖師圖等々を賜はりて、聖法を衆生に傳へむと欲すること燬くが如く、歸心矢と化して故郷を思ふ。そもそも敕命は空海をして二十年唐土に滞在せしむとの儀なりき。今、中途にして俄かに歸朝せむとは、承詔して勤めざるの罪を如何すべき。然れども、佛法は敕命よりも重く、歸朝して法を弘めずして何かはせむと覺悟するに至る。時恰も、唐の新帝即位したる砌、朝貢禮謁せむが爲に、高階遠成長安に来れるあり。空海すなはちこれを奇貨として、遠成とともに歸朝せむことを圖り、「本國の使と共に歸らんと請ふ啓」の書狀を提出し、本朝に歸りて密教の傳達に身を呈せむことを訴ふ。

留位學問の僧空海啓す。空海、器、楚材に乏しく、聰、五行を謝す。摺つて求檢を濫て海を涉つて來たり。羊履を着いて城中を履るに、幸ひに中天

獻を入手せむとは圖る。漸く仲秋八月に及びて明州(浙江直)の港より本朝へ向けて出帆す。

復路の船旅また難澁を極むれども、辛苦の末、九州へ辿り着きたり。密教經典、曼荼羅等を故國に齎すを得たる喜び、亦何にか裝ふべき。後來、空海の回顧して申しけるは、「虚しく往きて、實ちて歸る」と。つらつら慮みるに、空海の入唐するを得たるは實に僥倖なり。前年、遣唐使を派遣するを得ずに終りたるがゆゑに再度の企圖となり、闕員の生じたればこそ、空海も其の機に恵まれたりけむ。歸朝の際にもまた、折よく九州へ向ふ船便に遭遇す。此人歸朝しての後は遣唐使の派遣は暫時停止せられ、新たなる入唐は三十餘年を経たる承和五年(八三八)の儀となる。この時、空海は既に入定してありき。噫、不可思議なるかな。空海、大法を覓めて大唐に赴き、漸くにして歸朝す。偶然なる幸運の重ねて出來し、

空國の般若三藏及び内供奉惠果大阿闍梨に遇ひたてまつりて、膝步接足して彼の甘露を仰ぐ。遂に乃ち大悲胎藏金剛界大部の大曼荼羅に入りて、五部瑜伽の灌頂の法を沐す。……此の法は則ち佛の心、國の鎮めなり。氣を攘ひ、社を招くの摩尼、凡を脱れ聖に入る嘘徑なり。是の故に十年の功、之を四運に兼ね、三密の印、之を一志に貫く。此の明珠を兼ねて、之を天命に答す。

〔性靈集〕卷第五。定本第八卷、八五〜八六頁)

この一文に據りて、空海の惠果より受けたる密教の極意は攘災招福と即身成佛に在りところそは傳へらるれ。此が申請あれば、畢竟唐朝朝廷も坐視するに忍びず、歸朝を認諾するに至り、大同元年(八〇六年)季春といふに、空海と橘逸勢と相携へて長安を出立す。長安を出づる先に、なほも經論、曼荼羅等の収集に務め、港へ向ふ道中、越州にても佛典文

大業を成就するを得たり。惠果を始め密教の祖師方の冥護あらずして、何爲かかる幸運を期するを得べくむ。

空海一行の九州に歸着したるはいづれの時なりしや、如今に到るまで未だ詳かにせず。然りと雖も、高階遠成の都に上らむとするあり。空海、これに託して『御請求目錄』を天朝に達せしむ。その日附に大同元年(八〇六)十月二十二日とあり。桓武天皇崩じ平城天皇登極あらせられて間もなき頃なり。此が目録には、自ら密教法財を數多携へて歸朝するを得たるは、一重に大御稜威の爲したまへる所、時滿ちざるに歸り來たるの罪は萬死に該るべけれど、聖教を齎したるは慶事なるらむとあり。その格調高き名文、以て空海の空海たる所以なりと感嘆せずんばあらざるなり。

今、則ち一百餘部の金剛乘教、兩部の大曼荼羅法會、請來して見に到る。彼清僕に沃いて、風雨舶を漂はずと云ふと雖も、彼の鯨海を越えて、平らかに

聖境に達せり。是れ則ち聖力の能くする所なり。

…空海、闕期の罪、死しても餘有りと雖も、竊かに毒ぶらくは、難得の法、生きて請來せることを。一たびは懼ぢ、一たびは毒ぶの至りに任へず。…

〔御請來目録〕、定本第一卷、四頁〕

然れども、都より悉皆沙汰なく、大宰府觀世音寺に留め置かるること、二年三年に互る。つひに入洛するを得たるは大同四年（八〇九年）の儀なりき。

これすなはち空海の長安往還の一端なり。佛教用語の難解なるはそのまま御紹介仕りたれど、疑義を抱きたまひたるの段は、關聯書物を閱せられ給はむことを。因みに、我が用ゐたる『定本弘法大師全

集』の訓讀法は聊か特異なれば、その旨御承知あらせられたく。

本日の講演會、これにて閉會仕る。來年また本シンポジウムの東洋大學にて開催せられて、皆々様と再會の叶はむことを願ひ、以て、閉會の辭に代へむと欲す。

謹みて、重々謝意を申し上げる次第なり。

（東洋大學學長）

（令和元年十一月十二日受付）